



私たちは、この投影された創造世界のあちこちで苦しみや不幸を見て、どのように感じ、どのように反応しているのでしょうか？ 2500年前、仏陀は世に仏陀を知らしめた、この苦しみとジレンマを抱きました。2000年前、イエスは世の人々の心をとらえる道（解決法）を示しました。今日の人々もまた、自らの存在の背後にある真理を悟るために、内なる神に尋ねる必要があります。

## 内なる神に尋ねなさい…

私は突然、その恐ろしい夢から覚めた。それは1977年11月15日のことだった。私たちはディヴィタルク（南インド、アーンドラ・プラデーシュ州の町）のサイクロン救援キャンプ、バラクラから数日前に帰ってきた。現地では、膝まで泥につかり、ただ体を維持するだけの食べ物を食べながら、遺体に取り囲まれたテントの中にいた。私たちはほぼ2週間、そこで過ごした。バガヴァンは無言のまま3、4回、夢の中に現れた。しかし、ヴィサカパトナムに帰ってきたあと、私は憂鬱な考えに取りつかれた。ここ18年か19年の間、私は車で病院に行くのに慣れていたのだが、何千人もの人々が何の輸送手段（乗り物）も持たないとき、自分が車に乗ることに罪の意識を感じた。Tシャツを着るのにもためらいを覚えた。多くの同胞が十分な衣類を身にまとえないだろうからだ。食べ物も同様だった。さらに、遺体の光景、遺体小屋などが、3日間続けざまに私の夢の中に現れた。そのような夢の一つから、私は突如として目が覚めた。

私は自分が鬱病の反応を示していることを知っていた。精神科医の診察を受けるか、あるいはスワミに手紙を書かなければいけないと思った。バガヴァンには2回だけ、純然たる公的な問題で手紙を書いたことがあった。当時、私は

地区の会長としての義務を果たしながら、州に2つある精神病院の一つでカウンセリングをしたり、薬を投与したりして、駐在の医官として働いていた。そのため、いくらか薬を飲めば、さほど大騒ぎしなくても自分の精神状態が改善することはわかっていた。

突然、私はある夢の中に入っていった。人々は、有史以前からありとあらゆる苦しみを体験してきている。そこから逃れ出る方法はないのだろうか？ 仏陀はそのことを熟考したが、仏陀の教えから恩恵を受けた人はさほど多くない。どの宗教の師の教えも似たようなものである。イエスが約束した黄金の国は、今までのところ現れてはいない。彼らは意識の別次元の話をしていたのだろうか？

バガヴァンは、私の質問に答えて解決法を示してくれるに違いない。十中八九、バガヴァンは手紙には答えてはくれないだろう。以前の経験からすれば、書物からその答えを得るか、何の関連もなく誰かと会話をして、そこからすべての疑問の答えが与えられるかもしれない。それゆえ、私はすぐその答えがほしかった。私はスワミがアンタラーヤミ（内在の神）であり、プラシャーンティ・ニラヤムだけに住んでいるのではないことを思い起こしていた。

不意に、内なる声が私に尋ねてきた。

「あなたは誰のことについて嘆き悲しんでいるのか？」

「あなたは誰から答えを得ようとしているのか？」

そして、

「あなたはいったい誰なのか？」

唐突に、三者、つまり苦しんでいる人類、神、私自身、が目の前に威厳をもって現れて、

「なぜ、このあらゆる苦しみが起こっているかわかるかね？」と尋ねてきた。

私は素直に答えた。

「はい、バガヴァン。『ひとつ』の代わりに、私がこれら三つの実在を感じているからです」

「では、この苦しみはいつ消えるだろう？」と、内なる神の声は尋ねた。

「私が、神と、あらゆる人々と、自分は分離しておらず、一体であると感じるとき、もはや苦しみは存在しません」

バガヴァンが鮮明な方法で、私に私自身の質問に答えさせているのを感じずにはいられなかった。

不意に、私は1970年のある日、ホワイトフィールドのインタビュールームでババが話していたことを思い出した。この忘れがたいインタビューの時、ババは、時折私が得ている答えは、私自身の思考プロセスから生じたものではなく、ババによって、直接与えられた啓示であることを強調していた。

茶目っ気のある笑いを含んで、その声は私に尋ねた。

「これはすべて理論的かね？」

私は答えた。

「いいえ、ババ。私たちは常に非二元（不二一元）の状態を維持することができないのです。そのせいで、この苦しみがあるのです」

しばらくの間、完全な沈黙が支配した。

その瞬間から、私の憂鬱はすっかり消えてしまい、その後は何日間も続けて、新しい生き生きとしたエネルギーを保つことができた。それゆえ、私たちに誤りのない助言を与える用意を整えた、私たちの内なるババの臨在をいつも自覚しようではないか。私たち皆が、その唯一の实在とひとつになることを、ババが祝福してくれますように！

